

国立国語研究所学術情報リポジトリ

<講演>琉球方言から考える言語多様性と文化多様性の危機

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 狩俣, 繁久 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000890

琉球方言から考える

言語多様性と文化多様性の危機

狩俣 繁久（琉球大学教授）

琉球大学の狩俣です。方言の危機的な状況と、私たちの現在の活動について、頼まれたらどこにでも行つて話をしています。なるべくたくさん的人に理解してもらつて、応援してもらいたいと考えているからです。今日はこういうところでお話をさせてもらうことを大変ありがたく、感謝しています。

私は一九七五年から琉球方言の調査をしていまして、そこで学んだことをお話しします。

写真は今帰仁村の、ノカンゾウ、ワスレグサともいいますが、いろいろな呼び名がありますが、その畑です。今調査をしている名護市の方言では「ニーブヤーゲサ（居眠り草）」というのですが、これを食べると不眠症が治るという伝承がありました。最近その効果がはつきりとわかつてきて、今ではこのように畑で作って、野菜として沖縄のスーパーで売っています。

言語によって空間にと時間を超えて遠く離れた人々によって伝えられ、蓄積され、発展してきました。私たちは、「高い文化」、「高い文明」と言いますが、言語がなければここまで発展してこなかつただろうと思います。言語の所有は人間と他の動物とを区別する最大の特徴の一つだと言つてもよいと思います。

人間が創造したものの中で、言語ほど緻密で繊細で複雑で、人間と一緒にになった道具はないだろうと思いません。どれくらいの量のものが言語によって形つくられているかというのは、図書館に行かれたらわかると思います。図書館に入っているあのすべてが言語で書かれているわけです。日本語で書かれている本の数だけを見てもすごいものがありますが、あれはまさしく言語のなせる業です。

文化多様性と言語多様性

文化と言語についての話をします。

文化も言語も社会に共有され、世代的に継承されるものです。どちらも同じ性質を持つています。

言語は思考の手段であり、知覚し認識した現実世界のできごと、微妙で複雑な感情、精密で膨大な量の知識と思想を表現し、伝達する道具です。ただ伝達するだけの道具ではなくて、言語があつてはじめ思考が成り立つとか、人間の知覚とか認識などとも深く密接につながっているもので

す。言語に深く刻み込まれた文化は言語によって理解され、言語によって継承されます。



沖縄島今帰仁村のノカンゾウ畑

は英語や日本語のような大言語も、話し手が数人の小言語も同じです。考えを伝える、感情を表現して伝える、あるいはそういうものを言語によって蓄積していく。そういう機能はどんな言語も同じです。

世界各地の言語には地域差があります。その地域差はどのようにして発生しているのでしょうか。

人間は、多様な自然や地理的な条件の中で環境に適応し環境変化に対応していく中で、絶え間ない創造と改良を積み重ねました。アフリカで生まれた最初の人間が世界中に広がっていく。住む場所も気候もいろいろと違う中で適応していくわけです。世界中に拡散している生物の中で、人間は、遺伝学的な変種が一番小さいのです。環境に適応していくなかで遺伝的な性質を変えないで適応している。それがなぜ可能かというと、文化によって適応していくことをしているわけです。

個人に発生した工夫と変化が一回限りのものに終わることもありますが、言語によって周囲の人間に伝達されて集団に共有されます。最近、木の実を石で割ることを発見したゴリラが仲間に伝えるということがわかつてているのですが、言語を持つていて故に人間が一番そういうことができるわけです。

絶え間ない文化の創造と改良は、遺伝的性質を変えることなく人間が多様な環境に適応し、世界中に拡散して繁栄することを可能にしました。

創造と改良、移動と拡散の

と言語の多様な地域差と個性を生む要因だと思います。人間が定住して安定した生活を送り、適応戦略に地域ごとの違いが生まれ、長い間に文化の地域的な変種が形成されていきます。広い地域を移動していると、広い範囲の中で共通性が共有されるのですが、定住してくると移動の制限が出てきますので、地域ごとの変種がより強くなつていくのだろうと思います。

言語にも同様の地域的な変種が生まれます。近接する地域の言語差は小さですが、遠く隔てられるほどに言語差は大きくなります。隣り合っていても高い山、海、川などによつて言語差がでることもありますし、国境や社会のあるいは政治的な境界が言語差を大きくすることもあります。

地域内の文化的・言語的な同一性は構成員をつなぐ絆となりますし、地域的アイデンティティを形成する重要な要素となります。違うことばを話す人、違う文化を持つていてる人たちに対し、「あの人たちと私たちとは違う」と言つて身内の意識が強くなりますが、言語はそのような地域的アイデンティティを形成する重要な要素です。

日本における文化と言語の地域差もあります。日本は亜寒帯から亜熱帯にまで及ぶ広い範囲に大小さまざまな島々が南北に細長く連なる島国です。日本は気候風土や生活環境だけでなく、歴史的にも文化的にも個性的な特徴を持つたたくさんの地域の集合です。日本語にも多様な地域的な変種、すなわち方言があります。

多様な日本語の諸方言

日本における地域差の大きさを考えるのに、日本列島をヨーロッパに重ねた地図でみてみましょう。この地図は真田信治先生と



かりまた・しげひさ

琉球大学教授／国立国語研究所客員教授
琉球大学法文学部卒業
専門は琉球語学

上村幸雄先生の共著の本
の中から借りてきました。

た。

北海道北端の宗谷岬は
スウェーデンのストックホルムに、根室がノルウ

人というように、だいたい人口の伸びも一緒です。

一八七九年に日本に統合されるまで450年間、日本とは別の琉球国という国がありましたが、その琉球国で話されていた言語です。本土から遠く離れ、大規模な言語接触がなかつたので、本土方言との言語差が大きく、琉球語と呼ぶことも可能です。最近はそのように呼ぶ人も増えてきています。



日本列島をヨーロッパに重ねてみる

356 SHINJI SANADA AND TAKIO UEMURA



Figure 18.1. Map of Japan as recorded since that of Edo.

北海道北端の宗谷岬は、スウェーデンのストックホルム東端の根室半島はノルウェーのオスロ

沖縄県西端の与那国島は、アフリカのモロッコをまぎかにみる南スペインのジブラルタル

までの言語差とか、文化の違いとか、あるいは気候風土の違いを頭の中に置けば、日本がどれだけ多様な文化あるいは言語を持つた国であるかということがすぐに理解できると思います。日本で伝統的に話されてきた言語は日本語とアイヌ語があります。日本語は日本語の標準語と諸方言とから成り立っていて、日本語の諸方言は本土方言と八丈島方言と琉球方言、大きくこの三つの変種があるのではないかと考えます。

には、那覇の人が知っている単語は1単語しかない。その1単語は「国民年金」です。(笑) 区長さんが「国民年金を納めろ」と村のみんなに言つて回つているというフレーズの中に出てきます。「国民年金」という単語は方言に翻訳できないのでそのままです。それ以外は一言も理解できません。ビートルズの歌なら知っている単語がたくさん出てくるのに、宮古島の歌には一言も知っている単語が出てこない。

同じ八重山諸島の一番西の与那国島の方言を石垣島の人は一言も理解できません。同じ八重山諸島の中です。そのくらい言語差があります。

今日は琉球方言についての話をします。琉球方言は琉球列島の伝統的な言語で、沖縄県の八重山諸島・宮古諸島・沖縄諸島・鹿児島県の奄美諸島の47の有人の島で話されている言語の総称です。800余の伝統的な集落で話されているのですが、面積も人口も日本全体の1%です。日本人が1億人を突破した頃、沖縄が100万人。日本が1億3000万人という頃に沖縄が130万

琉球列島を本州に重ねる

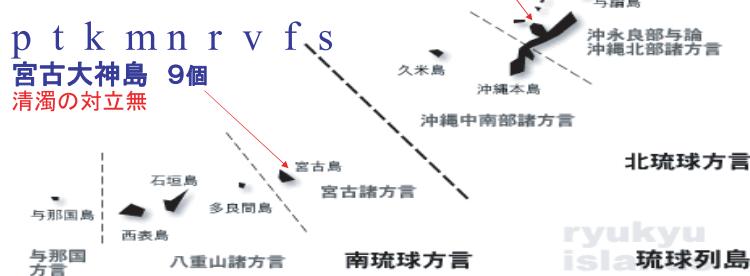
北端の喜界島は仙台、
沖縄島の那覇は長野県辺り、
宮古島は京都・大阪の府境辺り、
石垣島は淡路島の西、
西端の与那国島は岡山・広島の県境。

- 両端の方言では会話が成り立たないほどの言語差がある。
- 宮古島の方言を沖縄島の人は理解できない。
- 与那国島の方言を石垣島の人は理解できない。
- 沖縄島内の方言差も大きい。



琉球方言の多様性 子音

, p t k ts m n j w s h
 ? p' t' k' tz ?m ?n ?j ?w
 b d g dz r 今帰仁村謝名 25個
 清濁の対立+清音に2種の対立



中舌母音が2個あって、合計で11個母音があります。
 大神島の方言には、母音が6個あるのですが、大神島の方言の特徴は母音のような役割を果たす子音があることです。「kfu」(作る)という動詞は、「k」と「u」だけの単語です。「pstu」(人)の「ps」では、「g」と「o」に対して母音のような役割を果たしています。小さすぎて地図に載らないので海の上を指す。

しているだけのようみえる、とても小さな島です。

与那国島の方言は、原則として母音が「a, i, u」の3母音で、「e」も「o」もありますが、例外的です。11個の母音から3個の母音までの間に幅があるわけです。これは日本の全体から見ても大きな違いです。

子音の数で比べてみます。今帰仁村の謝名の方言は子音が25個あります。「カ」と「ガ」、「バ」と「バ」という清音と濁音の対立だけではなくて、清音に2種類の対立があつて、「パ」が2種類あります。「チャ」も2種類あります。「お茶」は「チャ一」です。「手かせ足かせ」の「かせ」も「チャ一」と発音するのですが。「お茶」と「かせ」は発音を区別しています。清音と濁音の対立の他に清音が2種類あり、そういうことで25個です。

それに対して、大神島方言の子音は9個です。清音と濁音の対立がありません。9対25。3倍近い差があるわけです。琉球方言がいかに多様であるかが理解していくだけだと思います。

琉球列島は文化的にも非常に多様性があつて、元ちとせ、中孝介など、奄美出身の歌手が出てきましたが、奄美地方の民謡と沖縄地方の民謡は音階そのものが違います。だから奄美民謡の歌い方と沖縄民謡の歌い方は違います。踊りも違いますし、伝統的な行事も違います。沖縄で盛んなエイサーも、宮古島ではしません。宮古島でエイサーをすると、ソーラン節か何かと同じで、違う島の文化、芸能を宮古島でやっている感じになるのです。本州あるいは日本全体の大きさも文化の多様性も方言の多様性もそのように理解したらよいと思います。

少數者の言語の変容と消滅の危機

人間は言語と文化を後天的に習得し、絶え間ない創造と改変を繰り返してきました。それ故に文化的多様性と言語的多様性が発生してきたわけです。

文化と言語の変化には自然や環境などに適応していく過程で発生する自律的な変化と他の文化や言語と接触し交流する中で影響を受けて、長い時間の中で進行する他律的な変化とがあります。

今のマイノリティの言語や、方言の危機的な状況は、そういう自然発生的な、自律的な、あるいは通常の他律的な変化によるものではありません。世界のマイノリティの文化と言語の危機的な状況は19世紀以降の西洋化、近代化など、ある特定の価値観が支配的になり、文化や言語に「こっちが良い」「こっちが悪い」という優劣をつけ、暴力的ともいえる圧倒的な力によって、マジョリティの文化と言語への置き換えが短期間に起きた結果です。

同じことが日本でも起きました。性急な西洋化と近代化と都市化によつて、かつては日本的なものより西洋のほうがよいとされ、学校でも西洋音楽は教えるけれども日本の音楽は教えないということがありました。また地方的なものは劣つたものとみなされて、軽んじられ、豊かな自然と風土の中で発達した豊かな地方の文化とそれを支えてきた方言も軽視され、辱められました。それによって誇りを傷付けられ、自信を失つた人たちもたくさんいたと思います。

琉球方言の場合

地方の文化や方言は、いま見直されつつあります。そのように見えるのですが、本当にそれは本物なのでしょうか。

沖縄でも伝統文化と方言が見直されつつあります。しかし知覚

して認識した現実世界の出来事、微妙で複雑な感情、精密で膨大な量の知識と思想を表現し伝達するとのできる緻密で繊細で複雑な言語体系、それをまるごと継承できているかというと、まったくできていないと思います。伝統文化の形式化と形骸化が進行しています。

たとえば沖縄のエイサーですが、若い人たちが一生懸命やります。あるおばあちゃんの八五歳のお祝いを、沖縄では「トウシビー」というのですが、そのトウシビーのお祝いで孫がエイサーをしたのです。そうすると、おばあちゃんが自分のお祝いにエイサーをしたと言つて怒つて帰つてしまつて、孫と口をきかなくなつた。なぜかと言いますと、エイサーは祖先や死者を慰める芸能なんです。孫は伝統的な芸能だから良かれと思つてやつたのです。ところが孫は歌詞の意味もエイサーの意味もわからぬままやつてしまつたわけです。エイサーの意味や本質を知らないで。

文化の継承というものが表層的な、表面的なものに留まつていで、根本的な理解が十分になされていないのではないかと考えられます。沖縄では三線も伝統的な民謡も盛んなのですが、その三線や民謡を教える師匠さんたちが方言を知らず、若い人たちに歌詞の意味を教えられない。だけど歌が「上手だ」、「下手だ」、三線の弾き方が「うまい」、「下手」と言つて指導しています。それで本当に伝統文化の継承が可能なのでしょうか。

沖縄のテレビでも「桜咲いたら1年生」という歌が流れます。沖縄では桜は一月に咲きます。北海道では五月月中旬くらいに咲きます。沖縄の自然を知つていれば変な歌なのですが、沖縄の子どもたちは全然違和感を感じていません。東京の三月末に咲く桜の風景を見て「桜咲いたら1年生」と歌うわけです。いっぽうで若い人たちには沖縄の季節感を表す言葉を知らないのです。

沖縄では一番寒い一月にハゼノキが真っ赤に紅葉するのです。が、その一番寒い一月に桜も咲くのです。秋と春が一緒にやつてきます。沖縄方言には春という単語も秋という単語もないわけです。

日本の季節変化が日めくりのカレンダーをめくるようだとすると、沖縄の季節変化は、週めくりのカレンダーをめくるようなゆつくりした変化です。沖縄の季節ごとに鳴く蝉の声、鳥の声、あるいは季節、季節に咲く花、花の色があります。しかしそういうことをまったく勉強しないまま、桜前線がどうの、紅葉がどうのとテレビでは見るのが、自分たちが住んでいる地域の自然を表す言葉を知らない。地域の自然や自然感などが教育されていません。

南北に長い日本。北と南、太平洋側と日本海側、沿岸部と内陸

部、大きな島と小さな島。

個性的で変異に富んだ自然環境に囲まれています。ということは、方言による自然の表現、季節の表現も多様で変異に満ちているはずです。その自然との関わり方や感じ方にも地域差があり、方言差があります。方言の語彙や表現に方言差があります。

豊かな自然の表現の例として、沖縄にはこうい

文法に反映される現実認識のしかた

	非過去	過去	
		第一過去	第二過去
沖縄方言	ワイン	ワタン	ワイタン
標準語	割る	割た	割った

太郎が ガラスを 割つた。

太郎ガ ガラス 割イタン。
第二過去 話し手が目撃した出来事。

太郎ガ ガラス 割タン。
第一過去 目撃の有無を問わない。
したがって、歴史的な事実は第一過去で表現。

豊かな自然の表現の例として、沖縄にはこうい

うものがあります。私が調査をした西原町の方言です。「マフックアーナチサクトウ ティーダ ネーラチカラ ハルカイ イケー」です。「真夏の日中は暑いので、太陽を萎えさせてから畠に行きなさい」。「マフックア」というのは、真夏の昼間のムツとするような暑い状態を言うのですが、この単語も標準語に翻訳しにくいのですが、面白いのは「ティーダ ネーラスン(太陽を萎えさせる)」という表現です。「日が沈んで涼しくなってから」と言わずに「太陽を萎えさせる」というのです。比喩的な表現なのですが、辞書で「ティーダ(太陽)」、「ネーラスン(萎えさせる)」を別々に記述していくはわかりません。「太陽を萎えさせる」という考え方・感じ方を言葉で表現する。知人が暑い日中に畠に向かっているときに、「日射病や熱射病になつて大変だよ。もつと涼しくなつてから行きなさい」というかわりに、さきの言い方をするわけです。

「チユース ウードー ティーダカジヤ スグトウ ュー ニンダリーサ(今日の布団は太陽香がするから、よく眠れるよ)」「ティーダカジヤ」は「太陽のにおい」という意味です。お日さまのにおいです。良く干された布団とか衣服は独特的のにおいがするのですが、それを「ティーダカジヤ」と表現するわけです。「今日の布団は(チユース ウードー)お母さんが干してくれたんだ」という感謝の気持ちを込めながら言うわけです。

「イフーナーシ ヌクバトーケトウ アミ フインテー(妙に生暖かいから、雨でも降るのだろう)」。これは温暖前線が通り過ぎて、その後雨が降り始める、その直前の独特的の湿度のある生暖かさを表現したものです。「そのうちに雨が降る」という独特の生暖かさを表わしたのが「ヌクバーン」です。その場にいないと、その感覚は伝わらないし、方言でないと伝わらないわけです。

このような日常生活の中での微妙な空気の感覚というものを表現する言葉があつて、それを伝えていくわけです。

標準語だと「割った」と過去を表す形があるのですが、沖縄の方言では「ワタン」と「ワイタン」という二つの過去形があつて、「ワタン」を第一過去、「ワイタン」を第二過去と言います。

第二過去は、話し手が見たことしか言わないのです。話し手が見ていなことは第二過去では言いません。たとえば「信長は本能寺で死んだ」を、「信長、本能寺で死ぬた」と第二過去で言うと、「お前、見てきたのか」ということになるのです。タイマシンでもない限り、見てくるわけにはいきませんから、第二過去で歴史的事実を言うことはできないわけです。

第二過去は、自分のことは言えないのです。「私が割りました」というときは第二過去は使えないわけです。

若い人が沖縄の方言を勉強していくときに、最初は過去形の使い方を間違えるのですが、だんだん方言が上手になつていくと、過去形の使い分けができるようになります。

質問をするときにも、相手が見た可能性があるかないかを判断して過去形を使い分けます。たとえば合格発表の郵便物が届くことになっている。だけど娘は用があつてでかける。家に戻つてきて家にいたお母さんに「郵便屋さん、ちゅーたんな」と第二過去で質問できるのですが、今戻つたばかりのお父さんには第二過去では質問できません。

沖縄の人は無意識なのですが、出来事を判断して第一過去と第二過去の使い分けをしているわけです。方言が違うと出来事の認識の仕方が違うのです。ことばが変わるということは、ただ伝達手段が日本語に変わる、英語に変わるということではなく、感受性とか物事の認識の仕方も変わっていくわけです。

方言の記録の大切さ

方言の継承に必要なことは何でしょう。私たちの暮らしは幾世代も前から続く先人たちの絶え間ない創造と改良の積み重ねの上にあります。私たちのものの見方や感じ方の基礎をつくり、行動の指針に影響を与えているものを検証するためにも、方言世界の記録から始める必要があります。

できるだけ大量の語彙と詳細な意味記述をした辞書と、文法書の編纂が必要です。標準語の対訳が載っているだけではなくて、いろいろな表現や例文を載せて、そこに込められているいろいろなことを記述する必要があります。文法書も形式や標準語の対訳だけが載っているだけでなく、さまざまな意味と用法とそれぞれの使い分けを記述する必要があります。

そのことによつて、かつて傷付けられ失われた自信と誇りを取り戻し、活力ある文化や言語として活性化させ、オリジナルな新しい文化や言語表現を創造することができるのだと思います。

たとえば与那国島の若い人たちが『ハリー・ポッター』の与那国島方言訳バージョンを作つてみたいたとき、それが実現できるような辞書と文法書を作つておく。辞書と文法書を見ながら、『ハリー・ポッター』の与那国島方言訳を作る。あるいは、この後に話をする菊秀史さんが『ハリー・ポッター』とか『ロード・オブ・ザ・リング』の与那国島方言バージョンの脚本を作る。あるいは与論方言の映画を作るとか、与論方言だけで書かれている物語を書く。そういうことを若い人がしたいと思つたとき、それを可能にする辞書と文法書とテキストを作つておく必要があるわけです。研究者に今求められていることはそういうことなのでは

ないかと思います。

未来の方言継承。50年後、100年後にどうなつているか。研究者が21世紀のはじめに調査した、データの残つてゐる方言は、50年後も100年後も残つてゐるけれども、その調査から漏れた方言は痕跡も残さず消えている可能性があるわけです。ある島の人たちから「どうして私たちの島の方言は残つていらないの?」ときかれ、「研究者が調査していなかです」という状況にならないよう、できるだけたくさんの方言を記録したいと思つています。

